



特集

青春。

ーきつと、一生忘れないー

寝屋川で輝く若者たち。人それぞれ、いろいろな形の青春があります。その中で、この夏、話題となった2校にスポットを当てました。

固 広報広聴課(☎813・1157)





File

1

同志社香里高校ダンス部

「ダンスの甲子園」と呼ばれる大会で2連覇を達成した同志社香里高校ダンス部のダンスにける熱い思いを聞きました。



創部11年で優勝6回 ダンスの強豪校

1951年(昭和26年)創設の同志社香里高校は部活が盛んで、ラグビーやテニスなどは全国レベルを誇ります。その中で近年、注目を集めているのがダンス部です。

2008年(平成20年)に開催された日本最大規模の高校ダンス部の大会「日本高校ダンス部選手権」夏の全国大会では、11年間で6度優勝しました。CMやアーティストのプロモーションビデオにも出演するなど、幅広く活躍しています。

「苦闘」乗り越えて、 見事2連覇

8月16日・17日の2日間にバシフィコ横浜で行われた「日本高校ダンス部選手権」全国大会。過去最多456チームが参加する中からスモールクラス(2人〜12人)とビッグクラス(13人〜40人)に各50チームが進出し、日本一を競いました。

大会2連覇を狙う同志社香里高校ダンス部は、「苦闘」をテーマに、女性忍者「くノ一」をイメージした紫色の衣装で、重厚な音に合わせて、力強いダンスを披露しました。

「プレッシャーや演技を作る



音楽も振付も衣装も 全部自分たちで

苦しみなど、自分たちが置かれた状況をテーマにしました」と話すのは、部長の川口紗依さん。「実は、大会の2日前まで振付を改良していました。全員が納得いくダンスで優勝したい、ただその思いだけでした」その甲斐あって見事2連覇を達成、同志社香里ダンス部の強さを見せつけました。

川口さんは「自分たちで作り上げるからこそ、優勝の嬉しさも負けたときの悔しさも大きい。それがやりがいにつながります」と話します。曲やテーマ、振付、衣装だけでなく、大会に出場するメンバーも自分たちで決めるというから、徹底しています。

同志社香里は中高貫校。6学年合わせると、部員は140人を超える大所帯です。校外のコーチの指導を受ける高校が多い中、普段の練習から発表作品づくりまで、全て部員だけで行っています。

顧問の東久保愛美先生は「私はダンスの技術的な指導は一切行いません。全て生徒たちに任せています」と話してくれ

ました。2002年(平成14年)に研究会として発足した当初から、生徒たちと話し合って決める方針が伝統になっているのです。

「オーディションを行って、全員が全員を採点して決めています。なかなか意見がまとまらないこともありませんが、それでも顧問の先生や部長が決める、ということはありません」

みんながどれだけ同じ動きをしていても、気持ちがバラバラでは一つになれません。そのスタンスが、見事なシンクロダンスにつながっています。



周りへの 感謝の気持ち 忘れない

「私たちが今こうしてダンスができるのも、家族や先生、そして周りの人たちに支えられているおかげです」

ダンスへの思いを聞くと、川口さんはまず感謝の言葉を口にしました。恵まれた環境でダンスができるのは、先輩たちの功績があつてのこと。そして、時間を作つては見に来てくれる顧問や全体的にサポートしてくれる保護者たち。周りへの感謝の気持ち、彼女たちをさらに奮い立たせています。



部長の川口紗依さん

一生ものの仲間と 忘れられない経験 胸に

川口さんにダンス部の強みを尋ねると、「絆の強さ」と、答えてくれました。練習は基本的に3年生が全体を指導しますが、手が回らないときは、2年生たちが自発的に指導に当たります。元氣のない子がいたら、みんなが積極的に声を掛け

ます。

引退を目前に控えた川口さんが、今後のダンス部に期待することは、「まずは日本高校ダンス部選手権の3連覇です。ただ、結果が全てではないので、自分たちの踊りができるように、仲間の絆を層深めていってほしいですね」

ダンス部の伝統は後輩たちに引き継がれ、さらに素晴らしいパフォーマンスを見せてくれることでしょう。



File 2

府立寝屋川高校野球部

今年の春、春夏連覇した大阪桐蔭高校との一戦が話題になった、府立寝屋川高校野球部の強さの秘密に迫ります。



「第29回選抜高等学校野球大会」入場シーン

**春夏合わせて
3度の甲子園出場**

寝屋川高校野球部は1910年(明治43年)創設の同校でも歴史のある部で、春夏合わせて3度の甲子園出場を誇ります。初出場した61年前、1957年(昭和32年)の夏、2回戦で数々の名選手を輩出してきた、早稲田実業高校と対戦し、延長11回の激闘の末、ノーヒットノーランで敗れました。相手のエースは、後の世界のホームラン王・王貞治(元巨人)さんでした。



「公立の星」が 目指した夏の甲子園

そんな寝屋川高校野球部がこの夏、大きな関心を集めました。きっかけは春季近畿地区大会大阪府予選の準々決勝です。絶対王者の大阪桐蔭高校を9回裏2アウトまで、4対3とリードして追い詰めたのです。結果的に敗れたものの、「公立の星」として、多くのメディアに取り上げられました。

夏の甲子園を目指す「第100回全国高等学校野球選手権記念 北大阪大会」でも順当にベスト8まで勝ち上がりました。強豪校・履正社高校に一步及びませんでした。が、達大監督は「ヒット数では相手を上回っていました。名前負けせず、互角の戦いができていただけに悔しかったですね」と。また、当時のエースだった3年生の藤原涼太さん（6ページ）の写真上にも「初回にホームランを打たれたのが全てでした。チーム力では決して負けていなかったと思います」とそれぞれ振り返りました。

練習は「質」で勝負

練習時間は、平日は朝1時間、昼30分、放課後1時間半の



キャプテンの田崎弘大さん

み。しかも、他のクラブとグラウンドを分け合いながら、限られたスペースで練習しなくてはなりません。その分、「どうすれば勝てるか」を考える（達伊ズム）が浸透しています。新チームのキャプテン田崎弘大選手も「練習時間が少ないことやスペースが限られていることは仕方がない。いかに質の高い練習ができるかを常に意識しています」と、話します。

勝つために大切なのは、「相手を分析し、相手を困らせること」だそうです。対戦相手の研究に力を入れ、今年の夏も履正社高校や大阪桐蔭高校の試合をビデオで撮り、徹底的に研究しました。他のチームと一緒にのこをやっていては勝てない。まして、有力選手が集まる強豪校に勝つには、独自の戦法が必要ということです。

マネージャーが 選手を甲子園へ

寝屋川高校野球部の強さの秘訣の1つに、女子マネージャーの存在があります。「入部するとき、達監督に『選手のサポートをしたいなら他の部活へ行きなさい。野球部は、選手がマネージャーを甲子園に連れて行くのではなくて、マネージャーが選手を甲子園に連れて行く。その覚悟があるなら入部してください』と言われました。びっくりしたけど、それで覚悟ができました」と、マネージャーの富川明香さん。

マネージャーは試合中、スコアブックをつけながら分析し、監督に分析結果を伝えるのが伝統になっています。多彩な球種を把握するのが、苦勞で、相手が投げた球が瞬時に分かるように日々、テレビやインターネットの動画を観て勉強しているそうです。



マネージャーの富川明香さん

目指すは62年ぶりの 甲子園

府内でも有数の進学校である寝屋川高校。勉強と部活の両立について、田崎選手は、「できるだけ多くの時間を野球に注ぎたいので、授業は集中して取り組んでいます。テスト前には頭を切り替えて頑張っています」と言います。

今後の目標は、「先輩たちから受け継いだ経験と僕たちのチーム力で甲子園を目指します。まずは、春の甲子園に21世紀枠で出場すること。大阪の公立高校ナンバーワンになるため、頑張ります」ときっぱり。寝屋川高校野球部は62年ぶりの甲子園を目指し、文武両道で青春の汗を流しています。

